

日本産業衛生学会九州地方会ニュース

産衛九州

発行所 日本産業衛生学会九州地方会
〒860-8556 熊本市中央区本荘1-1-1
熊本大学大学院生命科学研究所
公衆衛生・医療科学分野
TEL (096) 373-5112
FAX (096) 373-5113

発行責任者：地方会長 加藤 貴彦

(題字：倉恒匡徳筆)

巻頭言

ヨーロッパから学ぶ「時間」のとらえ方

鹿児島大学 大学院医歯学総合研究科 衛生学・健康増進医学研究分野 堀内 正久



働く上でも、生活をしていく上でも、人は「時間」について、それぞれのとらえ方をしているように思う。抽象的な説明で申し訳ないが、そのようなことを強く感じたのは、私がドイツに留学し、ヨーロッパの方々と一緒に生活をしたことが契機となっている。産業保健の領域で、心のバランスを崩され

業務から離れる方が増えていることを、私自身も強く感じている。そのような状況の中で、ふと思い出したことに、日本人とヨーロッパの方々の「時間」のとらえ方の違いがある。少し見当違いの巻頭言ではあるが、自由にテーマを選んでよいということに甘えて、駄文をお許しいただきたい。

今から10年以上も前のことである。フランクフルト空港に着いた次の日に、研究室を訪ね、ボスに挨拶をした。乳飲み子を連れて来たということや思いのほか宿舎が不自由であるということもあり、ボスに向かって、指を3本出して、「大変申し訳ないが、生活準備のためにこれだけ休ませてくれないか」と言ったつもりであった。ボスはしばらく考えた後、「来て早々、『3週間』の休みは少し長い、まー良いだろう」と許可をくれた。もちろん、私は、「3日」のつもりで尋ねたわけだが、どうも大幅に「時間」のとらえ方にずれがあったようだ。ドイツの労働時間は、日本に比べてだいぶ短いということを知っていたので、効率的に業務を行うということは予想の範疇で、メリハリをつけて研究が行われていた。私は、日本人よろしく、土日も研究のために、実験室に行っていた。あるとき、仲よくしていた大学院生が、「学生は良いが、あなたは土日に研究室に来てはいけない」と、私に意見をしてくれた。言っている意味が最初はわからなかったのであるが、理由を聞いて納得した。その理由は、「あなたは、Tomo（息子：5歳）の父親だから、土日は、父親の仕事すべきである」で

あった。また彼は、「今、あなたのやっている仕事を、将来、君の息子が引き継いでやればよい」という内容のことも言ってくれた。ヨーロッパの方々の時間のとらえ方に、「次の世代」が強く意識されているということを感じた。教会建築として、バルセロナのサクラダ・ファミリアがある。決して1代では終わることのない仕事を、数代かけて、建築が行われているのは有名な話である。ヨーロッパで生活していた時に、どうしてこんなにゆっくりと時間が流れているのかと不思議に感じたことを覚えている。日本に帰国後、慌ただしく時間が過ぎていて、明らかに時間の流れ方に違いがあるように感じた。もちろん、日本にも、京都や奈良に古いお寺や神社があり、ゆっくりとした時間が流れている場所があるように思う。しかし、むしろ地方においては、歴史的な建物も少なく、ゆっくりとした時間を感じることでできる場所は少ないように思う。日本において、ゆっくりとした時間を感じるためには、人工的な建造物というよりも、雄大な自然と接する行動が必要かもしれない。自然の営みは、それこそ何千年、何万年の歴史を有し、地方にこそ、そのような自然と接する場所も少ないように思う。しかし、歴史的な建物があったり、自然があったりしても、感じる側の人間が鈍感であっては、ゆっくりとした時間を感じることはできないだろう。留学中に、先のボスと二人で、学会の合間に有名美術館を訪ねる機会を持った。ボスは、展示されている絵について、一流の評論家よろしく、その知識を披露してくれた。生物学の教授なのにどうして、それほどまでに絵に詳しいのか尋ねてみた。その理由は、高校卒業後、半年ほど自由な時間があり、ボスはその間に色々な美術館巡りをしたとのことであった。環境の面でも、教育の面でも、「時間」のとらえ方を豊かにする仕組みがあり、日本とは異なっているように感じた。

ある就職関連会社のアンケート結果を目にした。日本でも、働くことの目的に、給与や出世よりも、成長や働き甲斐が上位を占めるようになったとのことである。成長や働

き甲斐の中に、自分だけでなく、「次の世代」を見据えた要素が入っていくことを望んでいる。自分のためだけに働いていると、「時間」のとらえ方は、極めて短いものになりがちではないだろうか。「次の世代」があると考えることができれば、自分にできることを確実に行うという姿勢となり、「時間」のとらえ方が幾分かゆっくりとなるように思う。ゆっくりとした「時間」のとらえ方は、働く上でも、生活をしていく上でも、質の高いものをもたらしてくれるように思う。現在の生活を見直す上で、異なる文化に触れることは大いなる意義がある。留学はやや特別なことではあるが、旅行でも良いので、是非産業衛生学会九州支部会に属する若者に、そのような経験をしてもらいたいと願っている。

一言

教授就任のご挨拶

河井 一 明

(産業医科大学 産業生態科学研究所 職業性腫瘍学)



産業医科大学 産業生態科学研究所 職業性腫瘍学研究室の河井一明と申します。平成24年4月より教授を務めさせて頂き、早くも2年が経とうとしているところです。私はこれまで環境化学物質や放射線による遺伝子DNAの損傷とその防除についての研究を主に行ってまいりました。がん化

の引き金となる環境化学物質の検出法として、さまざまな変異原性試験法が開発され、大気・水質・土壌・食品などに含まれる変異・発がん物質が数多く見つかってきました。労働現場では、毎年新たな化学物質が導入されていることから、労働安全衛生法において発がん性スクリーニングの目的で変異原性を調べる試験が取り上げられていることは皆様ご存知のとおりです。そうした中、新たな職業関連性のがんとしてオフセット校正印刷労働者に発生した胆管がんの報告がなされました。現時点で発がんの原因物質として有力視されている物質は、変異原性並びに動物での発がん性が既に報告されていた物質です。スクリーニング試験等で得られた基礎的な知見を、人の健康管理に役立てていく難しさを改めて感じた事件となりました。職業性腫瘍学研究室の主要な研究目的は、職業がんの予防にあります。そのためには、化学物質等のがん原性を正しく評価した上で対策を講じることが大切と考えます。その第一歩となる化学物質の有害性評価の過程では、生体の初期段階の影響を評価する指標が欠かせません。当研究室では、8-ヒドロキシデオキシグアノシン (8-OHdG) を発がん初期の生体影響マーカーとして着目し、測定法の開発・応用を行って

参りました。酸化的DNA損傷は、発がんに関わりのあるマーカーとして広く分析されています。今後、酸化ストレスを伴う発がん要因の調査をさらに進めると共に新たな生体影響マーカーの開発にも取り組んでまいりたいと存じます。さらに、近年新たな発がん機構として研究が進んでいるエピジェネティック発がんやDNA付加体検索を通して、職場環境中の変異・発がん物質の検出、生体成分との相互作用、リスクアセスメントへの応用に発展できればと考えております。産業衛生分野においてまだまだ未熟でございますが、微力ながらこれまでに増して、研究、教育に努力して参りたいと存じます。どうか皆様方のご指導、ご支援を賜れますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

産業医科大学に着任して

中 田 光 紀

(産業医科大学 産業保健学部 看護学科
産業・地域看護学講座)



平成24年8月1日に産業医科大学 産業保健学部 看護学科 産業・地域看護学講座の教授として着任してから1年数カ月がたちました。この紙面をお借りしまして、日本産業衛生学会九州地方会会員の皆様へ、ご挨拶申し上げます。

私は早稲田大学を卒業後、上智大学で心理学の修士課程を修了、その後、東京大学大学院医学系研究科博士課程にて、公衆衛生学教室の荒記俊一教授(現、埼玉産業保健推進センター所長、東大名誉教授)に師事致しました。私が学生時代の日本は、所謂、バブル景気に突入した頃でした。しかし、大学院在籍中にバブルは崩壊し、景気の急落ととも失業率も急増、人々の価値観や生活の在り方も急速に変化していきました。このような劇的な社会の変化を横目で見ながら、人の心の変化が病気の発症や進展とどの様に関連するのかということに興味を持ち、大学院の研究テーマにしたいと思うようになりました。ちょうどその頃、米国では免疫反応が古典的条件付けによってコントロールできることや、ストレスと脳・免疫系の関連が多数報告されるようになり、精神と神経・免疫系のつながりを研究する精神神経免疫学(Psychoneuroimmunology)が確立されはじめました。日本では、この種の研究を専門で行っている研究室は当時わずかしかなかった、研究をどのように進めるべきか悩んでおりましたが、幸運にも上智大や東大の研究室で実験系を組み立てることができたことと、学内外の面倒見の良い先生方のご指導のおかげで、「動物とヒトのストレスの免疫影響」というテーマで学位を取得することができました。

その後、科学技術振興事業団の特別研究員および独立行

政法人産業医学総合研究所（現、労働安全衛生総合研究所）の研究者として7年間勤務し、2004年6月から一昨年の7月末まで米国疾病予防センター・国立労働安全衛生研究所（CDC/NIOSH）の研究者として研鑽を積みました。NIOSHでは2007年より主任研究員、さらに2009年より職場組織とストレス研究チームのリーダー兼上席研究員として、多民族国家における職場ストレスの諸問題について研究を行いました。米国では特に、職場における差別（特に人種）や暴力（銃使用による傷害やテロ等）など日本ではこれまであまり注目されてこなかった領域に触れることができ、大変勉強になりました。両研究所では、一貫して職場ストレスの研究に加えて、睡眠の疫学的・実験的研究、喫煙・受動喫煙の健康影響、産業疲労、長時間労働、労災、メンタルヘルスについて研究を行ってきました。日米両方の多種多様なデータに触れる機会を得たことにより、人種、文化や人々の考え方の違いなどを理解する機会を得て、思考の幅が広がったと感じています。

一昨年まで所属した職場は国立研究所という性格上、主に行政に関連した研究が求められました。産業医大ではこれらの研究成果をもとに、研究者の自由で柔軟な発想に基づいた新しい研究に挑戦中です。また、同大は研究者間だけでなく、産業保健の現場や卒業生との強力なネットワークシステムが構築されており、世界に類を見ないユニークな大学であると感じました。今後は、これらの強みを活かして、教育・研究・社会活動および大学の発展のために邁進していきたいと考えています。

最後に、この紙面をお借りして恐縮ですが、私からお願いがあります。平成26年4月には産業医大におきまして、本学の医学部だけでなく産業保健学部その他4年制大学の卒業生にも門戸を広げて産業衛生学の専門的な知識と技術を教授する「産業衛生学専攻」の修士課程が設置されます。もし関心がある学生、卒業生や社会人がおられましたら、是非お問い合わせくださいますようお願い申し上げます。

お願いで締めくくることがになり誠に恐縮ですが、皆様の力強い御支援と御協力を心よりお願い申し上げます、御挨拶とさせていただきます。

新任のご挨拶

藤木 通 弘

(産業医科大学 産業生態科学研究所 人間工学研究室)



日本産業衛生学会九州地方会会員の皆様におかれましては、ますますご清栄の事と存じます。私は平成24年9月1日付けで産業医科大学産業生態科学研究所・人間工学研究室の教授に就任しました藤木通弘と申します。紙面より、会員の皆様にご挨拶申し上げます。

私の出身地は熊本です。卒業した大学は四国の香川医科大学（現香川大学医学部）で、その後も九州からは離れたところでの勤務が多かったため、この度、故郷に近い九州の地に赴任する事が出来ましたこともたいへんありがたく思っております。

私はこれまで生理学、特に睡眠の生理学の研究を行って参りました。睡眠の研究は、スタンフォード大学睡眠研究所の西野精治教授のもとで、ナルコレプシーの病因・病態研究を中心に都合7年ほど行ない、帰国後も研究を継続して参りました。今回、産業医科大学に採用していただいたのは、そういった経験や知識を生かし、産業医学における睡眠や生体リズムの問題に対し、基礎的なアプローチを含んだ研究および実践的取り組みをすることを期待していただいたの事だと理解しております。現在は、産業医科大学の産業医教育の場を通じて、睡眠衛生や睡眠障害の問題、そしてその解決の重要性についての啓蒙を行っているところです。今後も情報をアップデートして、教育内容の充実を図っていきたくと考えております。また、これまで行ってきた睡眠の基礎研究を、産業医学の領域へと応用する事も考えております。テーマの1つとして取り上げたいと思っているのは、交替性勤務における健康問題や睡眠障害についてです。まだまだ具体的な研究計画の策定までには至っておりませんが、職種におけるそのようなリズム変調に基づく問題などに対して、活動量計やPsychomotor vigilance test (PVT) などを利用し、現場にも応用できるような研究を行いたいと考えているところです。今年度、本学の基礎研究室附属で研究室を訪れた3年生の学生さん達と一緒に、上記の活動量計やPVTを用いて大学生の睡眠衛生についての研究を行いました。こういった実験室レベルでの研究を通じ、活動量計やPVTを将来的に産業現場へ利用する方法について考えて行きたいと思っております。さらに、このテーマについては動物モデルを作成し、より病態生理に切り込んだ基礎研究も現在始めているところです。また、交替性勤務の問題以外にも、職業運転手などで問題となっている睡眠時無呼吸などの睡眠障害についても、まだ実際の現場での認知が低かったり、対策が不十分であったりするなどの問題もあるかと思えます。それらについても何か出来る事はないかと考えているところです。

それから、これまで教室で行ってきた運動器等への負担を軽減させるための作業動作分析などや、作業における認知機能改善の研究なども継続し、さらにその知見や成果を中高年齢労働者の対策へと広げてゆくことを、研究室としては行っていきたくと考えております。

これまで述べて参りました研究を含めた研究室の活動の展開のために、日本産業衛生学会の会員の皆様をはじめとしまして、各方面の先達の先生方のご指導を賜ることができれば誠にありがたく存じます。なにとぞ皆様方の、これからのご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

研究紹介・学会報告

第113回九州医師会医学会
「産業医学会」報告

青木 一 雄

(琉球大学大学院医学研究科衛生学・公衆衛生学講座)

第113回九州医師会総会・医学会が沖縄医師会の担当により平成25年11月16日(土)・17日(日)の両日、ANA ホテルクラウンプラザ沖縄ハーバービューを主会場に開催されました。本総会・医学会には、担当県の沖縄県から90人、九州各県より222人および東京を含め他の地域から38人、総計350人の先生方が参加され、活発な議論と積極的な交流がなされ、総会、医学会が恙無く執り行われました。九州医師会医学会は、9つの分科会からなり、その第6分科会が「産業医学会」(分科会会長 沖縄県医師会理事(産業医学担当) 佐久本嗣夫先生)として開催されましたので、ご報告いたします。

今年は沖縄県医師会主催の産業医研修会の2つが台風のため日程変更を余儀なくされ、そのうちのひとつは、順延された研修会も再度台風のため再再延期になり、つい先日(平成25年12月13日)本年度最後の沖縄県医師会主催の産業医研修会が行われました。幸いにも第113回九州医師会医学会「産業医学会」は、当初の予定通り平成25年11月17日(日)開催されました。産業医学会には、沖縄県から79人、九州各県から48人、九州、沖縄以外の地域から3人の計130人が参加されました。いくつかの分科会に重複して参加された先生方もおられますが、この産業医学会は日本医師会認定の産業医研修になっている関係もあり、多くの先生方が朝から夕方まではほぼ1日産業医学会(産業医研修会)に参加されておられました。

九州医師会医学会第6分科会の産業医学会は、第2分科会の小児科学会と同じパシフィックホテル沖縄で開催され、例年の産業医学会のプログラムと同様にシンポジウムや一般演題発表はなく、日本医師会の認定産業医研修を兼ねた講演(1講演、90分、認定産業医1.5単位)が4講演組まれておりました。4講演を講演順に列挙しますと、沖縄労働局労働基準部健康安全課長の夏井智毅氏の(1)「安全衛生行政の動向について」、筆者の(2)「産業医のミニマムリクワイアメント～産業医活動の原点からグローバルスタンダードに向かって～」、伊志嶺整形外科院長の伊志嶺隆先生の(3)「整形外科的作業管理～VDT作業管理、腰痛対策など～」、山本クリニック院長の山本和儀先生の(4)「メンタルヘルス不調の1次予防から復職支援まで」でした。夏井氏の講演(1)では、第12次労働災害防止計画のメンタルヘルス対策、過重労働対策、化学物質による健康障害防止対策、腰痛・熱中症対策、受動喫煙対策について具体的な数値目標が設定されたこと、さらに、事業場におけるメンタルヘルスチェックの義務化を含む労働安全衛生

法の改正法案が、一度国会の解散で廃案になったものの再度国会審議に向けて準備をしていることなど、up to dateの労働衛生行政について、詳細な説明がなされました。また、筆者の講演(2)では、産業医の先生方に改めて産業医学の原点を想起していただき、現在の社会・経済情勢や労働衛生環境の多様化にも対応した産業医の職務について考えていただく一助にするため、総論的な産業医活動について概説し、併せて産業医や産業保健についてのグローバルスタンダードに向けての考え方についても紹介いたしました。午後の講演(3)では、整形外科医で労働衛生コンサルタントである伊志嶺先生から、産業医学会参加の先生方に壇上に上がっていただき、実際に荷物の持ち上げ方や運び方をしていただく実習を交えたユニークな講演をしていただくとともに、産業医として腰痛予防対策の具体的かつ実践的な指導やアドバイスを行う際の参考になる講演をしていただきました。さらにVDT作業における健康防止のための留意点についても実例を提示し具体的な改善例に触れていただきました。最後の講演(4)は、精神科医でありEAPを主宰しておられる山本先生から、メンタルヘルス不調者に対する具体的な対応や対処法を含め、メンタルヘルスの1次予防から復職支援の進め方に至るまで、メンタルヘルス不調の予防に向けた総括的でありながら具体的事例をも交えた講演をしていただきました。以上、4講演からなる第113回九州医師会医学会の産業医学会(参加者130人)は、非常に熱心な質疑応答の中、予定終了時間となり盛会裏のうちに終了しました。本学会終了時の産業医学振興財団のアンケート調査(アンケート回収率:76.2%)では、本産業医学会(産業医研修会)が非常に有用であった(40人)、有用であった(58人)であり、アンケート回答者の1人を除き、有用であったとの回答が得られました。本産業医学会の講演会が沖縄県内外からの産業医の先生方に少しでもお役に立つことができたのであれば、講師の一人として大変光栄に存じます。

最後になりましたが、第113回九州医師会医学会「産業医学会」は、日本産業衛生学会九州地方会との共催でした。日本産業衛生学会九州地方会の前地方会長の川本俊弘先生、現地方会長の加藤貴彦先生の両先生をはじめ九州地方会の理事、代議員、会員の皆様方のご支援、ご協力を得て無事終えることができましたこと、紙面を借りて衷心より厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。



日本産業衛生学会専門医紹介

専門医試験を経験して

平岡 晃

(一般財団法人 西日本産業衛生会 健康管理部)



産衛九州をお読みになっている皆様、はじめまして。西日本産業衛生会健康管理部の平岡晃と申します。この度、日本産業衛生学会専門医試験に合格することができましたので、報告を兼ねて寄稿させていただきます。

日本産業衛生学会産業医部会報にも執筆させていただきましたが、

専門医試験の約2週間前に妻が第一子である女の子を出産しました。この原稿では娘の誕生と専門医試験をほぼ同時期に経験して感じたことについて述べさせていただきます。当然出産予定日はわかっていましたので、出産後には勉強のためのまとまった時間は確保できないであろうと考え、できる限り前倒しで準備をするように意識をしていたつもりでした。そして予定日より3日早く迎えた出産当日は陣痛に苦しむ妻の隣で、なかなか出てこない赤ちゃんにハラハラしながら、労働基準法35条の業務上疾病がなかなか覚えられずヒヤヒヤしていたことを覚えています。そして初めての子どもの誕生により案の定、というより想像以上に生活が大きく変化し、試験前日まではまとまった勉強時間は一切確保することができませんでした。しかし、それでも日常業務の合間で細かな時間を見つけてできる限りの準備をした結果、なんとか試験に合格することができました。

試験直前に生まれた娘も今では5ヶ月になり、毎日仕事から帰ると満面の笑顔とキレイの良い寝返りで迎えてくれます。最近では娘の顔を早く見るために、できる限り時間内で仕事を終わらせる工夫をしています。そのポイントは①時間の空いた時に少し先の予定まで考えてその時点で可能なことはやってしまうこと、②短い時間に分割可能な作業は業務と業務の合間で細かく進めることの2つだと考えています。その成果か、出産前には考えられないくらい早い時間に帰宅することができるようになりました。これも専門医試験を通して自分自身がレベルアップしたことの1つかもしれません。

専門医試験の合格は産業保健の専門家としての第一歩だと考えています。試験を通して自分の知識の浅さや経験不足を痛感しました。これからも産業医としてさらに成長していけるように、日々研鑽を積んで参りたいと思います。

最後になりますが、指導医の産業医科大学の森晃爾先生をはじめ、多くのご指導いただいた多くの先生方にこの場をお借りして厚く御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

部 会 報 告

産業看護部会 産業看護講座実力アップコース第8回報告

産業看護部会長 柴戸 美奈
(公益財団法人 福岡県すこやか健康事業団)

平成25年10月26日(土)福岡県中小企業振興センターにおいて産業看護講座実力アップコース第8回を開催いたしました。産業看護師登録者23名が参加され、産業看護継続教育カリキュラム8単位を取得いただきました。

今回のテーマは産業看護職が講義を受ける機会の少ない労働衛生工学とし、その総論と少ないマンパワーで職場環境改善を円滑に行うために有効なツールの1つである「アクションチェックリスト」の活用について、ポイントを押さえ自らの業務に生かすための技術を学ぶことを目的としました。

初めに、産業医科大学名誉教授田中勇武先生より「産業看護に必要な労働衛生工学の知識」を講義していただきました。まずは一問一答のテストからスタートし、緊張の中にも楽しみながら、久々の学生気分に戻りました。続いてその基礎知識を生かすために、アサヒビール博多工場の住徳松子先生に事例提供をいただき、騒音職場の作業環境評価方法と分煙のための作業環境改善技術の演習をいたしました。

午後からは、職場環境改善のためのアクションチェックリストの開発事例を福岡徳洲会病院の坂田知子先生よりご紹介いただきました。職場は自らの力で成長し進化するものであり、私たち看護職はそのファシリテート役であることを再度認識いたしました。最後に、中尾労働衛生コンサルタン事務所ワーク&ヘルスの中尾由美先生よりさまざまなアクションチェックリスト集が示され、それを生かすファシリテート術の講義をいただきました。そして実際に自社の職場をイメージして「元気職場づくりアクションチェックリスト」をチェックして、グループワークにて意見交換を行いました。単に知識を習得するだけではなく参加者のそれぞれが、職場環境改善のアクションを起こすためのヒントを持ち帰りました。受講生からは「自分たちの職場でも活用できそうだ」との感想が多く、狙い通りの展開となりました。ご協力いただきました先生方には大変感謝申し上げます。

今後の産業看護講座は平成27年度からの新たな産業保健看護専門制度の設立に伴い、その仕組みが変更されます。新制度における講座開催については、産業看護部会本部からアナウンスが行われますが、日本産業衛生学会員でも産業看護部会未加入の方々には部会主催の研修会等の案内が届かなくなる可能性があります。出来るだけ早い時期に産業看護部会の入会手続きをしておかれることをお勧めします。

九州地方会産業看護部会では今後も産業看護研究会等の研修会の企画を続けていく予定です。会員の皆様のご支援、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

産業歯科保健部会報告

産業歯科保健部会幹事 山本良子
(日本予防医学協会 九州事業部)

暑さが残る9月の名古屋において、第23回産業医・産業看護全国協議会が開催されました。今回の歯科保健部会は、「メンタルヘルスとデンタルヘルス」をテーマにシンポジウムを行いました。

ストレスによる唾液分泌や粘性の変化によりおこる口腔内乾燥、う蝕の多発、歯周疾患の増悪、神経症的習癖（拇指吸引癖、咬舌癖、歯軋り、食いしばり等）について、またその逆に口腔内の不具合が心に影響することも多いことから、メンタルヘルスとデンタルヘルスとの関連についての総論を、北里大学精神科の精神科医である宮地英雄先生にご講演いただきました。各論の味覚異常について、研究だけでなく料理人やマイスターとしても腕を奮われる味覚のプロで名古屋市開業（本山デンタルクリニック）の澤田真人先生に、口腔乾燥や舌痛症などの歯科心身症については、日立横浜病院横浜診療所の澁谷智明先生にご解説いただきました。そして最後に、島根大学医学部公衆衛生学の精神科医である井上顕先生には、自殺対策にむけての検討・詳細な対策の立案についての必要性や不安障害の中の特にパニック障害についてご解説いただいたのち、精神・歯科・社会医学等様々な職種からの見解と連携の必要性についてご提言いただき有意義なディスカッションを行いました。

次年度、岡山で開催される総会のシンポジウムでは、「これからの健康科学」～産業保健におけるダイバーシティ・マネジメント戦略～をテーマに、馬越惠美子先生（桜美林大学）に「今、日本に求められるダイバーシティ・マネジメント」。看護の立場からは栗岡住子先生（産業医科大学）「産業保健におけるダイバーシティ・マネジメント～ダイバーシティ・マネジメントを支援する産業保健活動」。歯科から池邊一典先生（大阪大学）には、「高齢者の口腔保健（仮題）」80歳と70歳の口腔機能と全身の運動機能の比較について。相田潤先生（東北大学）には、「格差と口腔保健（仮題）」Social determinants（ソーシャルキャピタルや社会経済的地位など）に関する社会疫学研究



や歯科疾患の格差に関する疫学研究について、ご講演いただきます。その他、口腔癌をテーマにした研修会、働く女性に焦点を当てたフォーラムを開催します。多様性を見つめ認めて、どのように生産性をあげる企業活動を行っていくのか、その時歯科はどのように対応するのかを考えて参りたいと思います。皆様のご参加をお待ちしております。

産業衛生技術部会の活動報告

産業衛生技術部会幹事 伊藤昭好
(産業医科大学 産業保健学部 環境マネジメント学科)



産業衛生技術部会は、毎年秋に全国レベルの大会を開催しています。今年は、名古屋国際会議場において開催された産業医・産業看護全国協議会の会期中に同じ会場で9月27日(金)午後、第22回産業衛生技術部会大会を開催しました。この大会では化学物質管理をテーマとして、産業衛生技術シンポジウムが企画されました。演者と演題は次の通りです。名古屋俊士先生（早稲田大学理工学術院）に「化学物質管理に関する行政の動向」、武田繁夫先生（武田労働衛生コンサルタント事務所）に「リスク管理にもとづく化学物質管理」、片岡直也先生（株式会社豊田自動織機）に、「事業場における化学物質管理の実際」についてお話しいただきました。これらの講演を踏まえて、フロアと講師一体となって熱心な討論が行われました（写真参照）。産業現場の作業環境管理分野では、現在、化学物質のリスクアセスメントに個人曝露濃度の測定と評価をどのように活用すべきかが大きな話題となっています。産業衛生技術部会も専門委員会を立ち上げて検討を続けており、来春、岡山の学会でガイドラインが提案される予定です。

関連して、前日の26日(木)夕刻には、「産業現場における呼吸用保護具」をテーマとして、第17回産業衛生技術専門研修会がフィットテスト研究会と共同開催されています。田中茂先生（十文字学園女子大）、中原浩彦先生（EMG マーケティング）の講演の後、保護具各メーカーの協力を得て、各種呼吸用保護具の着用およびフィットテストの実習が行われました。夕方遅くの開催でしたが、産業衛生技術部会以外への参加者も多く、会場は熱気にあふれていました。大会と専門研修会を、産業医・産業看護全国協議会との同時開催として2年目で、まだ手探りの感も否めませんが、来年も金沢で開催される予定です。

学会案内**平成26年度九州地方会学会のご案内
(第 2 報)**

会 期：平成26年6月20日(金)・21日(土)
会 場：産業医科大学 ラマツィーニ小ホール
北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1
<http://www.med.uoeh-u.ac.jp/>

学 会 長：堀江正知
日 程：平成26年 6 月20日(金) 午後
理事会、一般口演、特別講演、懇親会
平成26年 6 月21日(土)
一般口演、教育講演、代議員会、
総会、自由集会

特別講演：株式会社サンリオ 山口裕子氏
(ハローキティ 3 代目デザイナー)

教育講演：産業医科大学 産業生態科学研究所
人間工学教室教授 藤木通弘先生

参 加 費：3,000円
懇親会費：4,000円、6 月20日(金) 19～21時
ぶどうの樹 (バス送迎あり)
<http://www.budounoki.co.jp/tenpo/budounoki/>

演題募集：平成26年 3 月に学会案内をお送り致します。
演題×切：平成26年 4 月20日(日)
抄録×切：平成26年 5 月20日(火)

平成26年度九州地方会事務局：
産業医科大学 産業生態科学研究所
産業保健管理学教室 (井上仁郎)
電話093-691-7407、FAX 093-601-6392
e-mail：j-shkkan@mbox.med.uoeh-u.ac.jp
ホームページ：
<http://www.uoeh-u.ac.jp/kouza/sanhoken/h26sanei/index.html>

理事会報告**平成25年度
第 2 回九州地方会理事会報告**

平成25年度第 2 回理事会が、平成25年12月23日(月) 13：30～15：00に J R 博多シティ小会議室にて開催されました。

主な議題は以下の通りです。

- 1) 平成25年度第 1 回理事会議事録要旨について
- 2) 平成25年度事業・決算中間報告について
- 3) 平成26年度事業計画・予算案について
- 4) 平成26年度地方会学会の開催について
- 5) 平成27年度地方会学会の開催地について
- 6) 名誉会員、功労賞 候補者について
- 7) その他

なお、平成26年度九州地方会学会に関しましては、平成26年 6 月20日(金)・21日(土)に、北九州市 産業医科大学ラマツィーニ小ホールにて産業医科大学 堀江正知教授を学会長として実施することが報告されました。また、平成27年度九州地方会の開催は、鹿児島市にて鹿児島大学 堀内正久教授を学会長として開催することになりました。



編 集 後 記

2013年は流行語大賞が4つ、という話題の多い年でした。ノミネートされた50の言葉で1年を振り返ってみました。2月に越境汚染で「PM2.5」に注目が集まり、日経をはじめ数紙で“タバコ煙は典型的な「PM2.5」”と報道されたことは喫煙対策の追い風になりました。“バイ・マイ「アベノミクス」”と「お・も・て・な・し」で招致が決まった東京オリンピック。世界中から選手と観光客が来日する2020年までに諸外国のように屋内を全面禁煙とする法律を成立させることが喫煙対策に携わる私達の目標になりました。「特定秘密保護法」で国会を空転させることなく、居酒屋を含めて全面禁煙とする受動喫煙防止法を「今でしょ!」と成立させて、世界の人々をきれいな空気でお迎えしたいものです。ここまで書いたところで、“5000万(←1ヵ月早ければノミネートされていたはず)で辞任”というビッグニュースが飛び込んできました。都庁だけでなく、東京の、いえ日本全体の禁煙化の妨げになっていたヘビスマ首長でした。都議会の見事な「倍返し」に拍手。週刊誌の見出し“い・の・ち・と・り”には、思わず笑ってしまいました。

個人的には、4月からの連ドラで「じぇじぇじぇ」にはまり、9月に「あまロス」という喪失感を体験しましたが、ようやく立ち直って、科研費の継続申請までこぎ着けました。2014年も明るい年でありますように。(大和 浩)

九州地方会ニュース「産衛九州」

発行 平成26年2月1日

編集正責任者：加藤 貴彦(熊本大学)
 編集副責任者：市場 正良(佐賀大学)
 編集委員：青木 一雄(琉球大学)
 青柳 潔(長崎大学)
 石竹 達也(久留米大学)
 黒田 嘉紀(宮崎大学)
 佐土原浩子(九州電力 大分支店)
 住徳 松子(アサヒビール(株)博多工場)
 堀内 正久(鹿児島大学)
 大和 浩(産業医科大学)

(五十音順)

(編集事務局連絡先)

〒860-8556 熊本市中央区本荘1-1-1
 熊本大学大学院生命科学研究部
 公衆衛生・医療科学分野(担当：西村)
 TEL(096)373-5112 FAX(096)373-5113
 E-mail: k-public@kumamoto-u.ac.jp

